

福山空襲から80年を迎え、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、人権の尊さを次世代へ継承する取り組みが重要となっています。「福山空襲語り部アーカイブ映像」「無意識の思い込み発見かるた」制作は「自分たちの地域をどう運営し、どう未来をつくるか」を主体的に考え、行動する力を育てる住民発の取り組みです。行政任せでは見えにくい課題を地域住民の視点で発見し、対話し、合意形成へとつなげる“自治の土台づくり”を提言します。□

人権・平和をテーマにした福山市の教育・啓発事業 ——次世代に必要な「学び」——

広島県本部／福山市職員労働組合連合会・人権生涯学習部会

1. 戦争はいけん、戦争なんかするもんじゃない

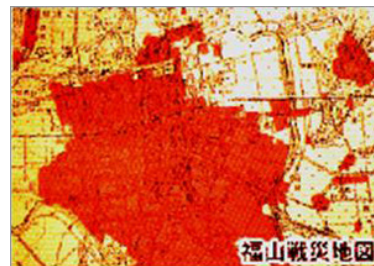
(1) 戦後80年 記憶を未来につなげる福山空襲語り部アーカイブ映像制作

8月8日は何の日か知っていますか？

1945年6月から福山に対する空襲が始まりました。市の南東に位置した海軍航空隊への機銃掃射が、グラマン戦闘機によって繰り返されました。7月終わりにはB29が1機飛来し、宣伝ビラが散布されましたが、福山は爆撃予定都市に入っていました。

そして、広島市への原爆投下の二日後の1945年8月8日、22時25分ごろから約1時間にわたって福山市に全長30mの爆撃機B29が91機飛来し、556トンもの焼夷弾が投下されました。焼夷弾は豪雨のように降りそそぎ、瀬戸の波に火柱が散り、低空を飛ぶB29の銀翼が紅に染まりました。福山のまちは火の海と化し、市役所、警察、駅をはじめ主な建物、学校は瞬く間に焼け落ち、国宝の福山城天守閣もまた、福山の悲しみを象徴するかのように崩れ落ちました。福山のまちは焦土と化し壊滅的な被害をうけたのです。

市街地のおよそ8割を焼失する激しい空襲を受け、355人もの尊い命が奪われ、福山空襲からわずか7日後の8月15日、戦争は終わりました。



平和の大切さを未来につなぐ今を生きる私たちの責任

福山空襲から80年を迎え、戦争体験者の高齢化は着実に進み、当時（福山空襲の歴史）を語り継ぐ人もごく少数となってきています。

そのような中、福山空襲の記憶を風化させないために、貴重な戦争体験者の声を保存し、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、人権の尊さを次世代に継承するために、戦争体験者の声を初めて映像で制作することを福山市の人権行政を推進していく根幹の姿勢として取り組みました。

証言者には、3人の方に出演いただき、当時の記憶を語っていただきました。

戦後80年福山空襲語り部アーカイブ映像

この映像（約40分）は、福山空襲を体験した3人の市民の方の証言を中心に、空襲の実相・街の被害・当時の生活・戦



争の悲惨さを語り継ぐために作成された記録映像で、インタビューを軸に構成しています。その概略をご紹介します。

1945 年 8 月 8 日 福山空襲をどのように体験したのか・・・

証言者 石川紘彦さん（86 歳：当時 5 歳）

福山城北側にある三蔵稲荷神社で暮らしていました。

5 歳の時に空襲に遭い、福山城の天守が焼けて崩れ落ちるのを目撃しました。その炎に包まれ崩れ落ちる福山城の姿や市街地の広範囲が炎に包まれ、夜空が赤く染まった記憶を生々しく証言しています。



証言者 森近静子さん（88 歳：当時 7 歳）

自宅そばの防空壕で難を逃れ、一夜を過ごした翌日、橋の上で女性の遺体が横たわっているのを見つけ手を合わせたことや、街を歩くと街中に建物や犠牲者が焼けた臭いが強烈で忘れられず、「あの当時の思い出は何もいいものではありません」と涙ながらに語っています。

証言者 近藤茂久さん（92 歳：当時 11 歳）

防空壕に転がり込んできた焼夷弾で顔にやけどを負い、慌てて外へ逃げると「周りは泣き叫ぶ声で阿鼻叫喚（あびきょうかん）の状態だった」と証言しています。



アーカイブでは、福山市出身のラジオDJの小林克也さんがナレーションを務め、後半では自身の体験談も語っています。



・・・犠牲になった方、被害を受けた方だけではなく、福山に住むみなさんの日常すべてを破壊した福山空襲。このような惨劇が実際にあった事を忘れないでください。そして、8 月 8 日の記憶をつないでいてほしいと思います・・・。

この言葉で映像は締めくくられています。

今後、この映像を学校の平和学習や地域の学習会、福山市人権平和資料館の展示などで活用していく予定です。また、YouTubeの福山市公式チャンネルでも、フル ver.（41 分）、10 分 ver.（短縮版）を含め視聴できます。



戦後の復興から
ばらのまちの福山と
呼ばれるまで。
そこには、和らぎを
取り戻すため、
一丸となって協力する
住民の熱意と
想いがありました。

1950 年代に初めて公園に市民がばらの植栽をした様子（写真提供：福山市）

戦後、再建復興が進められ、福山の町は姿を一新していきました。しかし、市民の心はなかなか混迷を抜け出せないでいました。

そんな時、現在のばら公園付近の住民が、「戦災で荒廃したまちに潤いを与え、人々の心に和らぎを取り戻そう」と、戦後 10 年を経過した 1950 年代半ばに、現在のばら公園にばらの苗木約 1,000 本を植えました。

住民が熱心に世話を続けたばらは、やがて真っ赤な花を咲かせました。

戦後復興の象徴（シンボル）としてばらの花は、復興を遂げた福山のまちに根を張り、咲き誇っています。そのばらの花たちは、80 年前の悲惨な歴史から目を背けず、教訓として何を学び、何を次世代へと継承していかなければならないのかを、今を生きる私たちに訴え続けています。



また・・・

1945年8月6日、広島市に投下された一発の原子爆弾によって、まちは一瞬にして廃墟となり、爆心地近くに植えられていた「アオギリ」は枝も葉も吹き飛ばされ、幹も焼けたでしてしまいました。

ところが、枯れてしまったと思っていた「アオギリ」から新しい芽が出てきました。一生懸命生きようとしている「アオギリ」に人々は勇気づけられ、生きる希望がわいてきました。

この原爆の生き証人（樹）である「被爆アオギリ二世」が福山市に寄贈され、今も恒久平和を求めて、元気よく大地に根をはっています。



原爆の生き証人（樹）である「被爆アオギリ二世」。平和を希求する地域の人々が大切に守り続けています。



福山市戦災死没者慰霊の像「母子三人像」。空襲で亡くなった母子3人がモデルです。寄り添った姿で亡くなり、引き離すことができなかったという証言をもとにつくられました。

おわりに・・・

「生きたかった命」を尊重するとは・・・

「戦争はいけん、戦争なんかするもんじゃない」

福山空襲戦争体験者の3人がビデオの中で口を揃えて私たちに訴えかけた言葉です。

この言葉から、戦争の悲惨さと取り返しのつかない尊い命の犠牲を身をもって知った体験者が、同じ苦しみを二度と繰り返してはならないと強く訴え、平和を守り続けてほしいと願う切実な思いを、制作に関わったものとしては感じられずにはいませんでした。

私たちは、戦争の悲惨な歴史を風化させないために記録や証言を収集・保存し、教育や広報を通じて次世代へ伝える役割を担っています。また、市民が歴史に向き合う機会を創り出すことが重要であると同時に、さらに、国際協力や対話を重視し、争いを未然に防ぐ仕組みづくりを進めることで、恒久的な平和の実現に寄与する責任を負っています。

福山空襲80年

～8月8日の記憶をつなぐ～



動画はこちら▶右の二次元コードから福山市ホームページへ。

2. 「なるほど」がたくさん！

(1) 「無意識の思い込み発見かるた」制作

～かるたを通して日常に潜む「無意識の思い込み・偏見」について考える～

■ ずっとこだわり続けている住民学習会

住民学習会は、これまで同和問題をはじめとする、さまざまな人権問題について学習することを通して「人権文化が根付いた地域社会の実現」を具体化するための身近な「学びの場」として発展してきました。

住民学習会の出発点となったのは、1979年に福山市教育委員会が出した「同和問題市民学習の推進構想—住民学習組織の確立のために—」です。その基本理念は、「すべての市民が人権尊重の自覚を高め、国民的課題としての同和問題の解決に取り組む意欲と実践力をもつ」ために「同和問題の解決を自らの課題とする全市民の参加を促す住民学習体制の確立と学習活動の一層の充実を図る」ことでした。

また、その基底には「同和問題は、人類普遍の原理である人間の自由と平等に関する課題であり、日本国憲法によって保障された基本的人権に関わる課題である。その早急な解決こそ国の責務であり、同時に国民的課題である」とする約60年前に出された国の同和対策審議会答申（1965年）があります。

1980年から始まった住民学習会は、同和問題について市民の理解を深めることからスタートし、今年で47年を迎えます。

福山市全学区（79学区）において毎年実施し続けている住民学習会や人権に関する研修会は、地域住民の主体的な「学びの場」から「行動化」へとつなげる取り組みとして、福山市の人権行政の貴重な財産となっています。

■ 市民主体の住民学習会にするために

これまで継続してきた住民学習会の内容やテーマが同和問題を中心に行っていることに対し、「同和地区の人たちのために、行政や学校関係者によって、各種団体役員を中心とする住民がやらされている学習会」といったイメージで捉えられる傾向も見られました。

このことについて、「まちづくりと住民学習」という報告書（1996年）の中で、次のように述べています。

「部落差別の仕組みについて学ぶことを積み重ねてきたことによって…（中略）…差別やいじめは何よりも、差別やいじめをする側に問題があるのであって、受ける側の問題ではないことへの共通認識の拡大です。こうした共通認識を前提に、地域における人間関係の結束・協調・連帯を強めることを目的にさまざまな活動が活発に実施されることが大切です。また、『最大多数の最大幸福』だけを原理としたまちづくりを進めていたのでは、何らかの理由で少数派の立場に置かれている人たちを、その意図はなくても結果として排除したり、置き去りにしたり、存在すら忘れてしまうのではないのでしょうか。…（中略）…今後とも、たとえ一年に一回ではあっても、自らの生き方を見つめ、人権感覚を高めていくと同時に、『私』にとっての住みにくさの原因をなくし、本当に民主的な地域にしていくための住民学習会に取り組んでまいります。」

ここに書かれている、「『私』にとっての住みにくさの原因」をなくすとは、人権問題を自分自身の問題ととらえ、市民一人ひとりが社会参加を阻まれることなく、地域において尊厳をもって暮らしていくことができる状態を示しています。

このように、福山市における住民学習会は、主要なテーマとして「同和問題と私たちのかかわりを明らかにする」ことを取り上げながら、あらゆる人権問題の解決につなげていくという拡がりをもった取り組みへと住民学習会を発展・普遍化させてきました。

市民の声を集めた「無意識の思い込み発見かるた」

このかるたは、「無意識の思い込みや偏見、知らないうちにつくられる意識」について、こどもから年配の方までが取り組みやすく、また、「人権」について学ぶきっかけとなるような教材をめざして制作しました。

「無意識の思い込み」について考え、自身の意識を振り返ることは、一人ひとりが大切にされる社会の実現に向けてとても大切です。

この「かるた」では、より身近にある事柄をとりあげ、住民学習会等で話し合いを展開しやすくするために、「無意識の思い込み」によって、もやもやした経験談など市民のみなさんの声を集めることからはじめました。

こども対象の「ふくやまこどもフェスティバル」や障がい者とスポーツで交流する「インクルーシブ・スポーツ・フェスタ」でアンケートをとったり、SNSでも意見の募集をしました。また、市内3か所でワークショップを開催して、さまざまな立場の人からたくさんの「もやもやした経験」などを集めました。

このかるたによって、他者との関係性（学び）のなかで自身の無意識の思い込みに気づけるために、多くの市民の声を集めるときに、「当事者の声」にこだわりました。さまざまな経験に根ざした真実が浮かび上がり、問題の本質を正確に捉えられ、多様な視点によって議論を深められることによって、解決策に説得力を与えると考えたからです。



- ・男らしさ、女らしさを求められる。
- ・「女性だから」とやらせてもらえなかったことがある。
- ・「男だからがまんしろ」と言われる。
- ・家事や介護は女性の役割とされている。
- ・父親が家事をやっていると周りから褒められる。
- ・娘が「ランドセルの色は黒がいい」と言ったら黒を買う。
- ・男の子が「ピンクのランドセルが欲しい」と言ったら、自由でいいと思う反面、やっぱり論すかな。
- ・男の子が「制服はスカートがいい」と言ったら困ってしまう。
- ・同性婚は、2人の将来がどのようなものになるのか、どこまで本人達が考えているかが気になった。
- ・「長男なんだから～」と言われることに「なんで？」と思う。
- ・障がい者と結婚する人が「いい人だ」と評価される。それだけでなぜいい人と思うのか。
- ・外国の人の中には、すごく丁寧な人もいれば、自由すぎてびっくりさせられる人もいる。
- ・「〇〇人だから」といった国籍による偏見がある。
- ・年配の人が「この頃の若い人が・・・」とか聞くとなんだかな～と思う。
- ・年配の人の意見を尊重し、「古いやり方は絶対」と言っておきながら、「でも若い人が頑張れ！」おかしくないですか？
- ・「公務員だからどうたらこうたら」と言われる。
- ・野球中継のアナウンサーは男の人しかいない。
- ・「A型なのに整理整頓できないのはなぜ？」と言われる。
- ・大阪の人は愛想がよくて商売上手。東京の人は対応が早くて、人付き合いがないイメージ。
- ・最近、結婚をしたご夫婦に何気なく「おさんは？」と声をかけてしまうこと。
- ・ヤンキーが電車で席を譲ったりしたら、少し驚く。



この他にも、連合（日本労働組合総連合会）の「アンコンシャス・バイアスに関するアンケート」結果等も参考にしました。

市民の意見を集め、親しみやすい人権学習教材を作成するこの取り組みは、人権課題を解決する一人ひとりの行動化につなげるために非常に有効的で、地域課題やニーズを的確に把握でき、反映できる点が大きなメリットです。住民自身が主体的に関わることで、課題への当事者意識が高まり、継続的な活動にもつながりやすくなります。

また、多様な意見や創意工夫が反映されるため、柔軟で実効性のある解決策が生まれやすく、さらには、学習を通じてコミュニティの結束が強まり、地域全体の活性化や信頼関係の構築にもつながります。

実際に、住民学習会や各種の団体の研修会に用いられ、学習の主体として意見交流に積極的に参加でき、自らの振り返りや社会問題について考え合うことができています。

こうした積み重ねが、持続可能な人権文化が根付いた地域づくりの基盤となっています。

「無意識の思い込み発見かるた」を紹介します

【 絵札 44 枚 】



【 読み札 44 枚 】

裏面には、その読み札の趣旨が書かれています。

【 あるなるカード 】

「あるあるカード」：当事者目線や

共感者目線の意見がある時などに使います。

「なるほどカード」：新たな気づきや理解を深めた意見がある時などに使います。

あるある

なるほど

	ひ ひっきりなしの家事 あなたの役割何と何？ 家事は、毎日のことですが、それが誰の役割であるかについては、固定的な性別役割分担意識により、多くの家庭で女性の役割だという暗黙の了解が存在することが少なくありません。 家庭での家事の分担はどうですか？
	ろ 六曜に 今もそんなにこだわるん？ 大安や仏滅などの「六曜」を気にする習慣は現代でも根強く残っており、慣習として六曜に基づいて行動を決めることがあります。 ただ、六曜に縛られすぎて起こりうる問題もあります。 六曜にこだわり過ぎると、どんな問題があるのでしょうか？
	し 障がいのある私が結婚、「相手は本当にええ人ね」と言われたけど… この言葉には、障がいのある人が結婚すること自体が特別なことであり、そのパートナーが「特別に善良な人」であるという前提が含まれ、対等な関係でないような思い込みがあります。 結婚はお互いの愛情や信頼に基づくもので、障がいの有無は関係ありません。 その他、障がいのある人に対してどんな思い込みがあると思いますか？
	ま まちづくり 女性の意見は聞かんのん？ どんな会議も多様な意見を取り入れることが大切ですが、まちづくり等の会議は男性中心が多いです。2023年度、福山市の審議会の女性比率は26.1%、自治会連合会会長では、1.3%です。 世界的に見ても、日本の女性リーダーの比率は低い状況です。 なぜ女性比率は低いのでしょうか？
	ち 「長女でしょ」 長女じゃけえなんなんよ 長女・長男は「しっかりしていなければ」と期待されがちですが、これがプレッシャーになることも。 でも性格は人それぞれ。 皆さんもこうしたイメージで窮屈に感じたことはありませんか？
	け 結婚は、本人どうしの意思で決めるものじゃろ？ 結婚は二人の意志に基づくべきですが、生まれや国籍の違いから周囲が反対することもあります。日本国憲法では「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立」とあります。 生まれ（被差別部落、国籍ほか）等により、周囲から結婚を反対する話を聞いたことがありますか？



「ん」から始まる言葉・・・・・・・・・・・・・・・・

住民学習会で「かるた」を使用した参加者の声から

もっとも多かった声は、かるたをきっかけに、自分の中にある無意識の偏り・偏見に気づき、「多くの気づきがあった」といった声や、無意識の思い込みに気づくことが、地域の人権意識の向上につながり、住みよいまちづくりの第一歩になるという前向きな意見もありました。



このような前向きな声の背景には、かるたの札が具体的な日常場面を扱っているため、「自分にも同じ経験がある」といった共感しやすいことや、参加者同士が「あるあるカード」や「なるほどカード」を使って意見交換・コミュニケーションが図られ、対話を通じて「気づき」や「学び」が深まったことが考えられます。その結果、単なるゲームではなく、自分自身の価値観を見直す体験学習となりました。

かるたの今後

このかるたの活用については、人権啓発を行う交流館職員研修や庁内の男女共同参画推進員研修、市民対象のふくやま人権大学や各地域の人権啓発推進連絡協議会等で実践研修を行いました。参加者がそれぞれの活動場所で、このかるたを使った人権啓発を行うときのリーダー的な役割を果たすことをめざしています。

また、2026年度からは、研修を受けた職員を中心に、「アンコンキャラバン隊」を結成し、「無意識の思い込み発見かるた」を使ったワークショップを地域団体や民主団体の研修会をはじめ、企業における職場研修会へ出前講座を行う予定です。

むすびに・・・

福山市における取り組みの2本を提案させていただきました。

福山市で進める「無意識の思い込み発見かるた」は、市民が日常に潜む固定観念に気づき、多様性への理解を深める参加型の学びを生みました。

一方、「戦後80年福山空襲語り部アーカイブ映像」や「福山空襲80年 後世に伝えたい記憶DVD」の制作は、地域の記憶を未来へ継承し、歴史を自分事として捉える契機となりました。

これらの取り組みは、市民が過去を学び、現在の課題を見つめ、共に未来を構想する循環が生まれ、地域自治の力を高める取り組みとして統合的に機能することができました。

どちらも、市民が「自分たちの地域をどう運営し、どう未来をつくるか」を主体的に考え、行動する力を育てることに主眼をおいた取り組みです。行政任せでは見えにくい課題を、市民自身の視点で発見し、対話し、合意形成へとつなげる“自治の土台づくり”のきっかけとなりました。

今後も、地域課題をしっかりと把握し、人権文化が根付いた福山市（地域社会）を実現するため、ここ被爆地「ヒロシマ」で公共サービスに携わる労働組合として、市民ニーズに応えうる制度・政策をもって質の高い公共サービスを追求していきます。

●無意識の思い込み発見かるたについての説明

- ・名称「無意識の思い込み発見かるた」
- ・読み札は、全部で44枚あります。
- ・テーマは、高齢者・障がい者・外国人市民・こども、LGBT、ジェンダーなどいろいろな分野を取りあげています。
- ・活用方法は「主に進行役が読みあげて進めますが、集まりのテーマや時間、人数、場所、対象者などによって工夫して使えます。
- ・あるなるカードを説明します。
「あるあるカード」：当事者目線や共感者目線の意見がある時などに使います。
「なるほどカード」：新たな気づきや理解を深めた意見がある時などに使います。

【ルールについて】

- ① 絵札の枚数を決め、テーブルに広げます。(44枚)
- ② 「あるなるカード」をあらかじめ机に配布しておきます。
- ③ 全体の進行役が読み札を読み「かるた取り」をします。
- ④ 机上に広げたすべての絵札を取り終わったところで、各自で手持ちの札の枚数を確認します。
- ⑤ 枚数が多かったことを評価し、みんなで拍手をする。

=====ここまでは全体で進行する=====

- ⑥ 「まずは、話し合い」の約束をします。
 - ・お互いを尊重しよう（しっかり話を聞く、話を途中で遮らない、一方的な否定をしないなど）
 - ・聞くだけでもOK（話したい時に意見を言ってください）
 - ・聞いた話は置いて帰る（この場で話したことはみなさんを信用したから話せた内容です。特に個人情報口外しないように）
- ⑦ 各自で手持ちのカードをよく見て、「自分の1枚」を選びます。
(選ぶ理由) ・自分にも同じ経験がある札
 ・共感できる札
 ・みんなで意見を交流したい札 など理由は何でもOKです。
※1枚も取らなかった人は、隣の人にカード1枚を選んで譲ってもらいます。
- ⑧ 順番を決めて、一人ずつ「自分の1枚」を発表します。
 - ・まずは簡単な自己紹介をします。
 - ・続いて、絵札を選んだ理由や絵札のエピソードについて感想や意見を発表します。
(みんなにどう思うか呼び掛けるだけでもいいです)
- ⑨ 意見を聞いて、もっている「あるなるカード」を出してもらいます。
※カードを示さない人がいてもOK！
- ⑩ ほかの人もその札の内容について意見を言う。(あるあるカードを出した人から意見を求めるか、自主的な発言を求める)
- ⑪ 札についての意見が出にくいときは、「札の趣旨」を説明して再度意見を求めます。
- ⑫ 意見が出つくしたところで、「この札の伝えたいこと」を読んで、次の人の「自分の1枚」についての発表に移ります。
- ⑬ ⑧～⑫を繰り返し、グループ全員が発表します。
※グループの全員が発表できるように時間配分をする。
- ⑭ 班で一人ずつ話し合った内容や感想を発表する。